商業教育への期待

—会計実務検定 財務諸表分析に寄せて—

一橋大学名誉教授 全商・会計実務検定試験外部委員 新田 忠誓

本稿を起こすに当たって私事で恐縮だが、もう故人になられた私の生き方、正確には、お金の扱い方で教示、むしろ御恩を受けた商業高校出身の方についての話から始めさせて頂きたい。

私は福島大学経済学部卒業後、東海銀行（現三菱東京UFJ銀行）に就職し、京橋支店に配属されたが、その時の直属の上司がその人である。仮にIさんとしておこう。読者には若い先生もおられ、昔の商業高校の様子をご存知ない方もおられると思うので、当時の状況に触れておくと、銀行の女子行員といえば、全員が高校とりわけ商業高校の卒業生で占められていた。同じように、支店の男子行員も高卒の方が殆どであった。現状を十分には把握していないが、今、私の接した商業高校の先生方から聞く限り、就職先は今では様変わりのものである。大手銀行と雖も支えていたのは商業高校出身者であった。

Iさんの話に戻そう。給料日が近づいたある日、Iさんに「おーい、新田君！君の給料のうち5千円を積立社内預金にしておいてやったからね。」と当然の事のように、むしろ恩着せがましく(?)言われた（現在、社内積立預金制度があるかは分からないが、集めた資金は自社で運用するので、利息は高かった。考えようでは、自社に投資しているようなものだと言える。）。初任給は2万5千円であった。私は「エ！」と思わず絶句した。福島の田舎から出てきて、東京勤務、しかも、周りは、銀座。ただし、この給料水準では、新橋界限で飲むのが精々であったが、固定収入を保証され、奨学金とバイト暮らしから脱却できたこと、希望(?)に燃えていた矢先であった。「I代理！それ給料の2割ですよ。何とかありませんか。」と値下げ交渉を開始した。5千円の積み立てを勧めたのは、Iさんだけでなく同じく商業高卒のIさんと同じ役職の某氏もそうであった。結局、中を取って、3千円に落ち着いた。この時言われたのが「新田君、いいか、人は人により裏切る

かもしれないが、お金は裏切らないよ。」であった。もちろん、当時、その意味など理解できなかったし、商業高校出身者はお金を中心に考え、何て細かく、失礼な表現だが嫌らしいんだろうという印象すら持った。以降、この預金は別勘定になった。否むしろ消え失せたというのが正確な表現である。

このせいで（預金控除分、実質運用（遊び）収入減で）、給料前の普通預金残高は毎月ゼロ。総務のおねえさんに白い眼で見られ、容貌・学歴（1年先輩は東大卒：毎年1人、大学卒が支店に配属された）もあったかもしれないが、支店の堅実な女子行員にはもてなかった。もてたのは専ら新橋のお姉さんだった。

そのような中、母校の教員にならないかという話が持ち上がり、紆余曲折があったが、銀行を辞め、母校の短大の助手（今の助教）になる羽目になった。給料をもらう段になり、Iさんの薫陶のお蔭で、給料の一部を積み立てる習慣が身に付いてしまっていた。そして、これが私の人生で大きな助けとなった。

母校での勤務において助手から講師への昇進の話が持ち上がった。この時、東大卒の上席の教授から「君は、学卒（福島大学）だから、昇進を後らす。」と言われ、論文数は私と同じ大学院卒の某氏が講師に昇進することとなった。私はカッと、「それなら、辞めます。」と辞表を出してしまった。さて、これからが問題である。大学院受験の勉強をしなければならない。勿論、生活も考えなければならない。何しろ母子家庭であり、親に頼る訳にはいかない。このとき、助けられたのが、Iさんの教えによる積立いわば籠城戦の備蓄米であった。

もし、このIさんの教えつまり備蓄米がなかったら、大学院に合格していなかったし、今の自分は無く、落城していたと確信している。「貧すれば、鈍す。」となり、余裕をもって受験勉強に集中できなかった筈である。ここで初めて、Iさんはもちろん、

彼にこのような商的センスを身に付けさせた商業高校教育に感謝し、商業教育の意義を発見した。大学では、このような具体的な処し方は教えてくれない。

これに関し、我々の時代には、小学校で5年生くらいであったかと思うが、小遣帳をつける時間があり、最低限、お金を扱う機会が設けられていた。しかし、理由は分からないが、私の妹の時代から、これは無くなったようである。また、私の通った普通高校にも商業という科目もあった。これも受験に関係ないということなのであろう、何時の間にか無くされた。つまり、現在の教育課程で、お金さらに商的精神に触れることができるのは、商業高校しかないと言えよう（近年では、大学でも職業教育を取り上げよとの文科省のお達しがあるようであるが）。

翻って、今の商業高校教育で、生きたお金、自分を守ってくれるお金を扱っているであろうか。商業高校と言えば確かに、お金を扱う簿記教育が中心となっている。しかし、扱いはどうであろうか。教科書墨守や検定簿記になっていないであろうか。検定簿記はややもすると、(嘗ての中国の)科挙のような問題のための問題である。日商2級を持っているが、実務で役に立たないという評を時に耳にする。

これに関し、簿記検定について私の体験に若干触れさせて頂きたい。現在、全国経理教育協会(全経)に関わっているが、あるとき、出題の機会を得たので、問題を変更してみた。

例えば、全経4級では、商品取引は分記法により出題されている。これは、初学者に商業利潤の源泉を理解させるためには良い方法である。しかし、この処理を行っている企業は少ない。このためであろうか、実際には三分法を扱う3級から受験させるのが商業高校では通常であろう。そこで出題に当たり、「商品ごとに仕入れ値が異なる高価な宝石を扱う宝石商では」と具体例を示す文言を付け加えた。しかし、これは上層部から削除を求められた。理由は「教育現場が混乱するから。」であった。要は、これまでの出題の形を変えられると、教師が困るというのである。生徒が困るというのではないようであった。4級こそ初学者いわば商的センスのない人に、複式簿記の仕組み、資産負債資本収益費用の関係を理解させる入口として重要であると理解した。そこで、営業収益と営業費用が対応するサービス業を予

定し、この業種(その時は、店を賃借りし商売しているペットのトリミング業)の簿記処理であることを明記し、問題を作った。これは、前掲、嘗ての就職の状況と現行の卒業生(商業高校や専門学校生)の就職先を考えると、身近な業種を例に、簿記を教えることこそ必要ではないか、これこそ生きた商業教育であろうと考えたからであった。これももちろん現場が混乱するという理由でボツにされた。

同じような策を3級の出題でも多く練ったが、ここでは、商品有高帳の件を紹介してみよう。そもそも経営管理において、商品有高帳の役割は何か?それは、在庫の管理つまり数量の管理であると考えた。なぜならば、店頭で品不足になれば、利益獲得の機会を失うし、店の信用にも関わる。簿記ができるということで就職し商品の管理を任されたら、このような情報作成が求められる筈である。これについて、簿記検定では、どうであろうか。よく出題されるFIFO法では、取引毎の出庫数量合計値、在庫数量合計値は表示されておらず、付すべき仕入単価の違いにより、単価と数量が並列的に表示されているだけである。決算数値算出のためには、これでも良い。しかし、現実の商売のためには、取引毎の出庫数量合計値、在庫数量合計値とりわけ後者の数量を把握し、常に品揃えの不足に対処しなければならない(興味のある先生は、新田他『エッセンス簿記会計(第11版)』森山書店、2015年、第6章を見て欲しい)。このような記帳こそ商売にとって必要であり、帳簿を付ける意味が出てくる。私は簿記を教えるとき、今、行っている商売の状況を学徒の頭に入れておかなければならないと考えている(これについても『エッセンス簿記会計(第11版)』3頁を見て欲しい)。しかし、この数量把握を前面に出した商品有高帳の出題も、これまでの検定には出ていないからという教師の都合でボツである(なお、この後、全経では出題について見直す作業を行うことにした)。こうなると、商業教育は教師に掛っていることになる。

2級になると、当座預金出納帳がよく出題される。この時の様式は(起源は税理士試験にあるように推理しているのだが)、借方側か貸方側のみになっており、それへの記入が求められている。ここで考えて頂きたい。そもそも出納帳を何のために付けるのかという点である。それは資金の管理のためであり、前述、商品有高帳と同じように、残高(有高)を記

載しない出納帳などありえない。そもそも借方側、貸方側のみで十分なのは、入金と出金が分離されている組織の入金係と出金係の場合である。このような組織を考えると、一つ思い当たる節がある。それは、相当昔の銀行や郵便局の窓口である。当時は、入金が入金窓口、出金は出金窓口と別れていて、入金係は入金を後ろの出納統率係に渡し、出金係は出納統率係から出金を受け取り、お客に渡していた。今このようなシステムを取っている企業は存在するであろうか。とくに2級次元の企業においてである。ただし、出納統率係は入金出金全体を統括し、現在高(残高)を把握する出納帳を作成しなければならない。このように考え、残高を表示する形の出納帳を出題しようとした。さらに述べると、当座取引となると、企業は取引銀行ごとに帳簿を作成している筈である。そうなれば、出納帳には銀行名(支店名)を記載する必要がある。いわゆる人名勘定である。この点は、当座借越契約を結んでいる場合、より鮮明になる。つまり、当座預金、当座借越勘定による仕訳ではなく、当座勘定による仕訳(一部、教科書に当座勘定を使う仕訳は簡便法という記述があったが、これは間違いである。)を前提に、当座勘定出納帳の記入を求めなければならない。借方残が総勘定元帳の当座預金勘定、貸方残が当座借越勘定に転記される。このように考えると、従来の簿記検定の問題が商人活動に適った実践的なものであるとは言えないと思う。

それでは、上記のような形式教育ではなく、生きた教育にするためには、どうすればよいであろうか。単純な解は、先生方に企業勤めを体験してもらおうということになるかもしれない。だが、これは無理である。今のように、お上からの書類提出命令や指導でギョウギョウ詰状態では時間の余裕がない。しかしそれ以上に、元々、給料が保証、生きていくための前提、お金の保証のある身では、所詮、アマであり、傍観者である。他の道は無いのであろうか。そこで提案したいのが、自身の身を賭して体験する方法である。商的にいうと、身を保証しているお金を削ることである。より具体的には、企業つまり株に投資することである。このところ全商で行われる教員免許更新講習会の、財務諸表分析の講師を依頼されている。講習中「先生方、株をお持ちですか?」と必ず尋ねている。回答が真実かどうかは分

からないが、商業教育に関わっておられるのに、株をお持ちにならない先生が多いのに驚かされる。とくに女性の先生、若い男性の先生に顕著である。中には、株は博打のように危険なもの、近づいてはならないものと考えておられる方も見受けられる。そして、「株で損をしたら、どうするんですか。」と反論される。このような言を発する方は売買を予定し(永く付き合わず支配できる)目先の利得を考える‘投機’家である。投機家は、簿記論的かというと、資金を自分の勘定に入れている。だから、損は身に染みる。そもそも投資したお金は別勘定、冒頭の体験談を思い出して頂くと、無かったものと考えなければならない(適切な例かどうかは別にして、教育では、思いもよらず突然、出世した卒業生が訪ねてくるように)。これが‘投資’家の心得えだと思う。

投資家となれば、投機家のように単なる貨幣、つまり株価ではなく、投資企業の実像が気になる。一方、会社は、これに対応すべく様々な情報を発信している。また、株主総会の通知による株主総会の決議事項への参加、さらに計算書類、監査報告書の閲覧などなど生きた体験ができる。簿記の話をすると、配当政策の簿記処理の意味、例を挙げると、配当金には2種類あり、利益剰余金からの配当には課税されるが、資本剰余金からの配当には課税されない、すなわち、会計の資本取引と損益取引の違いの実感、また、合併の簿記処理の体感、つまり、合併条件により、あっという間に自分の株主権が縮小する体験などなどである。

ここで最も重要なのは、日頃、検定教科書で教えている事が現実であるかどうか分かる点である。つまり、先生方が生徒に教えていることが現状では、とくに制度改正により正しくないことが確認できる。もし、教科書の内容が現状に合っていないとなれば、先生方は生徒に嘘を教えたことになる。これは、その知識を会得して就職した生徒が会社で恥をかくことに繋がろう。生徒にとって先生は絶対だからである。もし、仮に、その生徒が世の中は変わっていくという事実を知らずに、つまり、教師から教科書記述の変化の体験を伝えられず、高校で習ったことを盲信し、疑う姿勢を学ばなかったとしたら、前掲、日商2級の逸話のように、商業高校生は使い物にならないという評価に至るかもしれない。これは商業高校にとって不幸である。商業教育に携わる教師は常に経済社会と共に歩まねばならないと思う。これ

が投資を進める理由である。私は、これを「お金には、色があり、貨幣として持っている限り無色透明に見えているお金に、色を付けるのが投資である。」と考えている。

会社の業績は、会社内部の経営管理能力のみならず、外部の状況、経済は言うに及ばず、政治、戦争、マーケット、人間の嗜好等々によっても影響を受ける。つまり、株主権を通じ、間接的ではあるが、これら影響も体験できる。これは、簿記に限らず、他の商業諸科目、経済学やマーケティングを教える時にも生きた教材になるはずであり、実態を伝えられると思う。

それでは、当面、株を買う資金が無いときは、どうするのと言う質問を受けるかもしれない。その時は、正しく我田引水になるが、私に関わっている『全商会計実務検定試験テキスト 財務諸表分析 六訂版』（実教出版）を読んで下さいということになる。本書は‘テキスト’であり、‘検定教科書’ではない。つまり、企業環境とくに制度の変化に対応して毎年改訂している。否、しなければならない。会計実務検定受験指導において、時に旧い版を使用されている先生に出会うことがある。しかし、実務は常に動いていることをご理解頂きたい。さらに、本書では、実際の企業を例に挙げている。とくに「第4部 財務諸表分析の実際」では、これまで、生徒が興味を持ちそうな企業あるいは就職先になりそうな企業を取り上げて分析している。因みに、前者として、AUやソフトバンク（五訂版）、後者として、イオンやセブン&アイ（四訂版）、ビックカメラやK'sデンキ（三訂版）が挙げられる。

しかし、商業高校の先生方には、どうしても投資家になって欲しいと願っている。その際、購入すべき株式の判断をどうするか。この時こそ、本テキストの出番である。テキストで示した分析法を利用し、自分に合った企業を選択して欲しい。このとき、世評に惑わされないことが肝要である。今の株価、世評が企業の実力を反映しているかは疑問である。なぜならば、今の株価を決めているのは、投資家ではなくて、投機家であるから。美人薄明という言葉もあるが、美人は確かに現在の世評は良いが長続きはしない。今、評価されなくても、つまり、現在の株価が低くても、しっかりした心美人（財務構造の企業）を選べば、前に書いた私のピンチを救ってくれ

た積立金のようになる。なぜなら、経済の発展は堅実な企業によって支えられていると考えられるからである。そういえば、Iさんの奥様からIさんと共に歩めて良かったというお手紙を頂いた。Iさんのことだから、確実な投資家でもあったろうと推測している。奥様は幸せである。そういえば、巷では、年金制度の限界が論じられ、確定拠出年金制度の導入が囁かれている。この時の問題が金融教育の必要性である。商業高校で学んだ生徒には、会計実務検定試験の学習により、投資家のセンスを会得して欲しいと願っている。そうすれば将来、商業高校で学んで良かったと思う日が来ると信じている。

最後に、「お金に色がある。」と書いたが、これに関連し、冒頭の続きで、銀行時代に経験したことを述べさせて頂きたい。昔の銀行は、お札を行員が手で数えていた。そうすると、その紙幣が通ってきた道が分かるのである。銀座の人が持ち込んだお札には、ほのかな香りがしたし、築地を經由してきたお札には魚の臭いがしみ込んでいた。正にお金は生きている。そのお金の違いを生徒に教えるのが正しく商業教育であろう。これに関してまた一言。私の接した商業高校の先生は真面目な人が多い。中には、近隣の県の先生で商業の中心、銀座に行ったことがないとお答えになる方もおられる。そこで、講習会の折、銀座の高級ブランド店を冷やかしに行きませんかと有志を募った。有志は遠方の県の先生ばかりであった。その中でお一人、ブランド店で臆することなく高級商品について店員に色々尋ねられる先生がおられた。そこで、「先生、お金持ちですね。」と問うた。すると、答えは、教え子が銀座に、ある店を出しているとのことであった（プライバシー上、具体的業種は伏せるが、サービス業である）。その子は、学校時代、簿記検定に落ちまくりであったとのこと。しかし、どういう訳か、客単価に興味があり、金銭感覚の素養があったという。正に商的センスである。

なお、本年度の会計実務検定試験・財務諸表分析の【5】問は、期せずして飲食業ではあるが客単価の問題であった。本試験は、過去にもケーキやラーメン店など商的センスを養う出題を心掛けている。商業高校出身者が（東大卒と異なる次元での）商的社会で活躍できるセンスを身に付けるように！との願いを込めて。